

ぐるぐる回る大いなる意識、日の出から日の入りまで

グルマーイの誕生日のお祝いの報告

2018 年 6 月 24 日

シュリー・ムクターナンダ・アーシュラム

第 8 部

2018 年のグルマーイの誕生日のお祝いに参加した人たちより

夕暮れの崇拝

昼食のごちそう —— スワーディシュトゥ・バンダーラ —— の後、私たちはアンナプールナー・ダイニングホールを出て、セーヴァーをささげるためにそれぞれの目的地へと傘を差して向かいました。そうです、シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムの上に、土砂降りのゾウの雨が降ったのです。そう、雨にはさまざまな種類があります。1990 年代の初めにシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムで行われた「1カ月間のコース」の間に、これらさまざまな種類の雨の説明を聞いたことがありました。それぞれの雨には特定の動物に関連した名前が付けられていました。例えば、ゾウの雨は、分厚い幕のようにひっきりなしに激しく降る雨を言います。クジャクの雨は、やわらかで踊るような霧雨です。シカの雨は、まるでシカが跳躍しているような明るく強いにわか雨です。そして、ネズミの雨はより繊細です。

ここ、シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムでは、雷鳴がとどろきました。稲妻も光りました。大きく、暗い雲が、水分をたくさん帯びて空一面に流れていました。インドのモンスーンの雨のような土砂降りのにわか雨でした。私たちはあふれるほどの祝福を受け取っていました。

私たちの心は、この日の歌を歌っていました。 ジャンマディン・キー・ジェイ・ジェイ！
グルマーイ・キー・ジェイ・ジェイ！

サーヤン・カーラが近づくにつれて、そして、それと共にテンプルでの夕方アーラティーの時間が近づくにつれて、私たちは皆、「この大雨の中、アートマ・ニディからアヌグラハにどうやって行くのだろう」と思い始めました。程なく答えを得ました。というのも、驚いたことに、アーラティーが始まるちょうど1時間前に、雨雲が消え始めたからです。青空が現れ、太陽の光がアーシュラムの敷地に優しくきらめきました。

今年のグルマーイの誕生日に二人のシッダ・ヨーギが美しい詩をささげました。それは極めて的確に、そして感情豊かに、テンプルへ向かう中で私たちが心の中で何を感じていたかを表現しています。

咲き誇る花々の中で、
香り高いそよ風の中で、
鮮やかな太陽の光の中で、
水晶のごとき月光の中で、
響き渡るのはこれです、
これがメッセージです。
誕生日に敬意を！
グルマーイに敬意を！

テンプルに着いて、私たちは黄金の衣とターバンで装われたバデ・バーバの神々しい姿のダルシャンを持ちました。席に着く前に、バデ・バーバのパードゥカーに歩み寄り、プラナームをささげました。

突然笑い声が聞こえた時、私たちは瞑想の最中でした。目を開けるとシュリー・グルマールがテンプルに入ってくるではありませんか！ 敬意と喜びと共に、私たちはグルマールがバデ・バーバの前のパドゥカーに近づくのを見ていました。

参加者の一人は後にこのように語っています。

グルマールとバデ・バーバというシッダ・ヨーガのグルたちのいる所で、崇拜と献身の力、グルの恩恵と祝福を受け取ることの力に気づかされました。

グルマールがバデ・バーバにプラナムをささげた後、指揮者のクリシュナが、プージャーリーに夕方のアーラティを始める合図を出しました。彼の指揮で、ミュージシャンと参加者たちは、共に美しい音のシンフォニーを作り上げました。大太鼓が深く一定のリズムを打ち、鐘が鳴り、振り太鼓が鳴って、ほら貝の音が響きました。

これらの音が響いている間、3人のプージャーリーがバデ・バーバに向かってアーラティのランプを順番に揺らしました。小さいものから大きいものへ、次第に炎の数が増えていくランプを連続して揺らすのが伝統的なやり方です。3人目のプージャーリーがランプを揺らし終わると、太鼓の音も止まりました。プージャーリーは、それから樟脳(しょうのう)に火をつけ、香り高い煙をバデ・バーバの像に導きました。

樟脳は、サンスクリット語ではカルプーラ、ヒンディー語ではカプールと言い、アジアの諸地域に見られる常緑樹であるクスノキから採取されます。クスノキの木部と樹皮を蒸留すると、白いうろ状の固形物となり、それが樟脳です。樟脳は薬学的な特質で知られ、燃やすと空気を浄化するのに役立ちます。

プージャーの儀式の最後のささげ物として樟脳に火をつけます。樟脳の燃焼は、死から不滅への動きを表します。樟脳それ自体は死を意味します。樟脳を燃やした時に残るかぐわしい煙は不滅を象徴します。従って、信奉者たちが神に向かってその煙を導くと、それはつまり、不滅のもの —— 彼らの愛と献身 —— をささげていることとなるのです。神の祝福を受ける方法として、そのかぐわしい煙を信奉者たちが自分の方に漂わせるのも慣習となっています。

シッダ・ヨーガ・アーシュラムでは、朝と夕方のアーラティーの時に次の詩を歌います。

樟脳のように白い彼は、慈愛の顕現であり、宇宙の本質であり、
そしてへビの主をその首飾りとしてまとっている。パールヴァティーと共に、
いつも心のハスに住むそのシヴァに、私は頭を垂れる。¹

樟脳の香りのする空気の中で、私たちはハーモニウムの音に導かれて、夕方のアーラティーを歌いました。私たちの声は、心からの賛美で一つになりました。

夕方のアーラティーは、1960 年代からシッダ・ヨーガ・アーシュラムで歌われてきました。バーバ・ムクターナンダがさまざまな教典から詩を集めて編さんし、このアーラティーを作りました。(夕方のアーラティーについて詳しくはここで読むことができます。)

アーラティーが終わると、私たちはバデ・バーバに頭を下げ、席に着きました。するとグルマーイは、クリシュナにブーパーリー・ラーガの「オーム・ナマー・シヴァーヤ」のマントラのチャンティングを始めるようミュージックアンサンブルを指揮するように求めました。皆さんも思い出すでしょうが、このセレブレーション・サツァングでの一連のナーマサンキールタナの中で、このマントラをチャンティングしました。ですから、このディークシャー・マントラ、シッダ・ヨーガの伝授のマントラをグルマーイと共に再び歌うことは、二重の祝福となりました。私たちは数分間チャンティングをして、私たちのマインドは、あらゆるものに保護を与えてくれるこのマントラの

音の中に落ち着いていきました。それから私たちは瞑想し、マントラの響きは周囲の空気の中に渦を巻き続けていました。

シッダ・ヨーガの道では、瞑想からゆっくりと出てくることは非常に重要なことです。そのために、グルマーイは、楽に瞑想から戻る手助けとして、ウインドチャイムやゴングなど特定の音を使う習慣を定着させました。グルマーイの誕生日の夕方のアーラティーの後の瞑想の終わりに私たちの意識を瞑想から戻したのは、涼やかなウインドチャイムの音でした。

スワミ・イーシュワラーナンダは、夕方のアーラティーの司会者として話すために立ち上がりました。彼がマイクの方へ歩いていくと、グルマーイや私たちの多くは窓の外の壮大な景色に気づきました。確実に雨をもたらしそうな発光する積乱雲があったのです。グルマーイは、私たちがこの日に、世界中の多くの国々が祝っていることを象徴しているように、どれほどさまざまな季節を体験してきたかを話しました。

それからグルマーイは私たちに、もう少し長く「サツァング」をしたいか尋ねました。もちろんです。私たちは声をそろえて、「はい！」と答えました。

グルマーイは、ミュージックアンサンブルの一員であるオームカーリ・リンゼーに、この朝の誕生日のお祝いのサツァングの時に何を話す予定だったかを尋ねました。グルマーイは、今話してもよいと彼女に言いました。スワミ・ジは、グルマーイの誕生日のスケジュールを私たちが作り直す前、教えの評議会が朝のサツァングで体験談を話すようにオームカーリに要請していたことを参加者たちに説明しました。

オームカーリはグルマーイに感謝して、「黄金の物語」について話し始めました。「黄金の物語」は、1998年から2001年にかけてシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムとグルデーヴ・シッダ・ピートゥで、子どもたちや青少年たちにグルマーイから贈られた驚くべき贈り物です。「黄金の

物語」は子どもたちと青少年たちによる一連の演劇で、デニス・トーマスがそれを指導しました。これらの劇では、若者たちが詩聖の人生を演じ、インドの叙事詩である『マハーバーラタ』と『ラーマヤナ』からの物語を描きました。今年、2018年は、「黄金の物語」の20周年です。

今日まで、これらの劇に参加した子どもたち——現在は大人である子どもたち——は、参加した体験を鮮明に細かなところまで思い出します。彼らは学んだことをまだ覚えていて、それらを身に付けています。偉大な存在たちの人生を演じ、物語ることによって、これらの若者たちはセーヴァーのネクターを味わいました。彼らは、シッダ・ヨーガのサーダナーに深く関わること、それを強めることを学びました。彼らは、献身の重要性を理解しました。彼らは、神への切望と愛の力を体験しました。そして大事なことを一つ言い残しましたが、彼らはダルマの明確な感性を植え付けられたのです。これらの劇で受け継いだものは今日まで続いています。多くの子どもたちは、「黄金の物語」の録画を見て、そしてグルマールがそれぞれの劇のために作ったバジャン、アバンガ、カウワリを聞いて成長しています。これらの劇を見て、歌を聞くことから、彼らはシッダ・ヨーガの道の基本的な教えを認識するようになるのです。

オームカーリの話に戻りましょう。彼女は「黄金の物語」に参加したことについてこのように話しました。

「黄金の物語」に参加したことは、自分の周りの世界でどのように生き、貢献するかについて学ぶ、とても多くの瞬間を私に与えてくれました。

私たちは子どもや10代の若者でしたが、グルマールの教え、シッダたちの人生、そして彼らの体験が包含する驚くべき例示を、私たちは十分に伝えることができるというメッセージを受け取りました。私たちは具体的な方法でグルマールの教えを共有する器になるという素晴らしい責任を託されました。聖人ジャナーバーイーの役を演じることを通して、私は教えを体現することの意味を、より深く理解しました。

ジャーナーバーイーが目覚めているすべての瞬間は、セーヴァーと神を見つけることにさげられていました。一人の10代の若者として、ジャーナーバーイーの物語は私に強く響きました。そしてそれは依然としてそうであり、純粹に自分自身をささげるように私を鼓舞しています。

それからオームカーリは、グルマーイが「黄金の物語」のために書いた美しい歌、「スールダースの人生」を歌いました。その歌の言葉はこうです。

彼の名を歌うことで、私は喜びを感じます！

苦行をするのではなく、

彼の名を歌うことで、私は喜びを感じます！

ジャパをするのではなく、

彼の名を歌うことで、私は喜びを感じます！

聖なる川に沐浴(もくよく)するのではなく、

彼の名を歌うことで、私は喜びを感じます！

私は彼の名を歌うことで、喜びを感じます！

オームカーリが歌っている間、天が再び開きました。「黄金の物語」の歌に打楽器のような心地良い調べを加えながら、雨はテンプルの銅ぶきの屋根を激しくたたきました。それはまるで、天そのものがシュリー・ムクターナンド・アーシュラムの壮大なテンプルにアビシェーカを行い、祝福の流れで包み込んでいるかのようなようでした。

「黄金の物語」がどのようなものだったかという美しい一端を提供した後、オームカーリは座りました。私たちは、シッダの前にいる意義を彼女が私たちに思い出させたと感じました。これはサツァング—— 聖人たちとシッダたちの物語の中に没頭することでした。オームカーリの

歌は、シュリー・グルマーイと共にサツツァングにいたことがどれほど幸運なことかという気づきと理解を私たちに喚起しました。

グルマーイとバデ・バーバの前に座り、私たちはこの丸一日がどれだけ成果を上げたかに驚嘆しました。献身の美德を支柱として、私たちは夜明けから夕暮れまで崇拝しました。私たちの願いとシッダ・ヨーガの実践を通して、世界全体と祝福を分かち合っていました。

私たちがこの想いの中にいると、拡声器を通してそよ風が吹く音を聞きました。私たちが見上げると、グルマーイがマイクに息を吹き掛けているのが見えました。



© 2018 SYDA Foundation®. 著作権所有。

続く…

¹ Transliteration and Translation from "Āratī, Morning and Evening Prayer," verse 7, in *The Nectar of Chanting*, 4th edition, 2017 reprint (South Fallsburg, NY: SYDA Foundation, 2017), p. 122.